

## 4000年前のミイラにもアテローム性動脈硬化症がみられた

アテローム性動脈硬化症は現代人の病気であり、現代の生活習慣に関係していると考えられてきた。しかしながら、現代以前のその有病率は知られていない。本研究では、産業化以前の集団におけるアテローム性動脈硬化症について評価した。

4000年以上経過した137体のミイラの全身CTスキャン画像を、古代エジプト、古代ペルー、南西アメリカ、アリューシャン列島の4つ地域のミイラのものより集めた。アテローム性動脈硬化症は、プラークが動脈の壁に見られると確定的であり、動脈に沿って石灰化がみられた場合、その疑いがあるとされる。アテローム性動脈硬化症およびその疑いがあったのは、137体のミイラのうち47体(34%)で、4つの地理的集団の内訳は：古代エジプトの76体のうち29体(38%)、古代ペルーの51体のうち13体(25%)、南西アメリカの5体うち2体(40%)とアリューシャン列島の5体のうち3体(60%)であった。アテローム性動脈硬化症は、大動脈には28体のミイラにみられ(20%)、腸骨または大腿動脈には25体(18%)、膝窩または脛骨動脈には25体(18%)、頸動脈には17体(12%)そして冠状動脈には6体(4%)でみられた。

血管床5つを調べたところ、アテローム性動脈硬化症が1~2床でみられたのは34体(25%)、3~4床でみられたのは11体(8%)、全5床でみられたのは2体(1%)であった。死亡年齢は、アテローム性動脈硬化症のある血管床の数とも関連していた。

したがって、アテローム性動脈硬化症は産業化以前の、農耕時代以前の狩猟集団で一般的だったといえる。一般に現代病であると考えられているにもかかわらず、現代以前の人類にアテローム性動脈硬化症が存在していたことは、疾患に対するより基本的な素因がある可能性を示唆する。

(出典：Lancet 2013; 381: 1211-1222)